

目次

はじめに 1

第一章 室町時代以前の浦上氏

1、浦上氏の登場 9

浦上氏の系譜／浦上氏と播磨国浦上荘／浦上氏の初見・左衛門入道覚恵

2、浦上氏の権力伸張過程 16

南北朝動乱期の赤松氏と浦上氏／播磨国小宅荘と浦上景祐／備前国磯上保と大徳寺／

備前国守護代・浦上氏の出現／備前国守護代・浦上助景／美作国守護代の浦上氏／

播磨国の支配機構・守護代と在国奉行／守護奉行人となった浦上助景／

侍所所司代・山城国守護代に就任／赤松満祐の播磨下国事件／

下国事件の波紋と意外な展開／正長の土一揆の勃発と鎮圧／嘉吉の乱と赤松氏の滅亡／

嘉吉の乱で活躍する二つの浦上氏／山名氏の支配と赤松氏庶流の抵抗

第二章 中興の祖・浦上則宗

1、赤松氏再興への道 51

浦上則宗の兄弟・子息たち／赤松氏再興の条件／赤松氏旧臣、後南朝から神璽を奪還／

赤松政則と加賀国半国守護／加賀国半国支配の展開／室町幕府における則宗の活躍

2、応仁・文明の乱と浦上則宗 64

文正の政変と赤松氏への余波／応仁・文明の乱、開戦へ／朝倉氏をめぐる則宗の調略／

赤松政則が侍所所司に就任／乱の終結と赤松氏の懸念／則宗と備前国との関係／

則宗と美作国／浦上氏と播磨国支配／則宗の山城国守護職就任

3、山名氏の播磨国侵攻 84

三ヶ国奪還への不穏な動き／守護・赤松政則の電撃的な解任劇／

「謀書の御判」から赤松政則復活への動き／有力被官人との和解、赤松氏の反撃開始／

山名氏の撤退と別所則治の台頭

4、三ヶ国回復後の情勢 94

赤松政則の死と三ヶ国動乱／赤松氏の家督継承をめぐる問題／浦上氏と播磨国支配／「天ヲ戴く松之下草」——浦上則宗の死／浦上則宗の評価をめぐって

第三章 浦上村宗と赤松氏

1、浦上村宗の登場……………107

則宗没後の赤松氏領国の内情／浦上村宗の系譜／將軍家の内紛と村宗の登場

2、義村・村宗の領国支配から下剋上へ……………115

赤松義村の成長／義村・村宗の播磨国支配／赤松義村が組織した奉行人制／

義村・村宗の備前国支配／義村と村宗の反目／惨敗した義村と赤松御曹司を擁する村宗／

赤松義村の最期

3、浦上村宗の台頭と反発……………131

赤松氏被官人たちの反乱／戦いの行方——播磨国の激闘から山名氏退散まで／

村宗と室町幕府の関係／村宗による領国支配と被官層／村宗と有力被官人との関係／

村宗と別所氏・在田氏との対立／連戦連勝から裏切りへ——村宗の最期／

村宗権力の評価——村宗は戦国大名なのか？

第四章 浦上一族の復活と浦上政宗

1、「浦上蜂起」と浦上政宗の登場……………150

赤松政村の復活劇／浦上氏残党の抵抗から和睦へ／村宗の長男・浦上政宗の登場／

伯父・国秀による浦上氏の統率・支援体制／尼子氏の播磨侵攻と赤松氏の反応／

政村の官途授与／政宗の動向と赤松晴政との紐帯／奉行人筆頭・政宗の台頭／

政宗と地域との関係

2、浦上政宗の権力基盤と支配体制……………178

政宗と家臣団との特殊性／政宗の備前国支配／政宗の領主間結合と弟・宗景との不和／

衰退する政宗権力と宗景の伸長／政宗の権力構造と兄弟対立へ至る道

第五章 浦上宗景の盛衰

1、宗景の家臣団について……………187

これまでの宗景のイメージ／「盟主」宗景の家臣団構成／宗景と領主間の結びつき／

家臣の状況——岡本氏／家臣の状況——日笠氏

2、宗景の発給文書から見る知行地付与……………196

知行地宛行の事例①中島氏／知行地宛行の事例②坪井氏／知行地宛行の事例③渋谷氏／
知行地宛行の事例④馬場氏／知行地宛行の事例⑤額田氏／知行地宛行の背景

3、尼子氏の侵攻と政宗・宗景の確執……………208

尼子氏の備前・美作侵攻／尼子氏の美作国支配——天文年間から／

政宗・宗景兄弟間の抗争／複雑な抗争の経過／播磨など各地への侵攻／

足利義昭・織田信長の調略

4、宇喜多直家との抗争と浦上一族の滅亡……………220

謀略家・宇喜多直家の上洛／宗景と宇喜多直家の協力体制／

信長から与えられた「播備作之朱印」／宗景と直家の戦い／天神山城の落城／

宗景権力の構造とは／浦上氏の終焉

主要参考文献 237／浦上氏略年表 240／あとがき 244

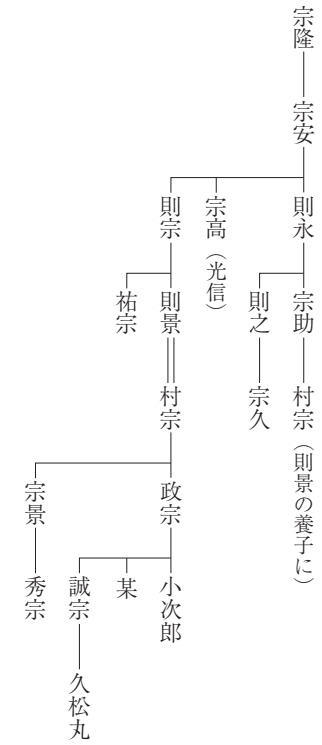
第一章 室町時代以前の浦上氏

1、浦上氏の登場

浦上氏の系譜

最初に、浦上氏の出自について触れておこう。まず、「浦上」は多くの人名辞典では「うらがみ」と読むが、「うらかみ」と読むこともある。浦上氏の系図に関しては、『続群書類従』に「浦上系図」が掲載されているが、錯誤があまりに多く信を置けない。他にも浦上氏系図と称するものはいくつかわわっているが、内容に問題があるものが大半である。一次史料と突き合わせても、人物名などが合致しないことが多いのである。浦上氏の系譜が史料上で明らかになるのは、ようやく室町期の則宗以降のことで、それ以前については不明な点が多い。

一般的に、浦上氏は紀氏の流れを汲むと言われている。この点を明らかにするのは極めて難しいが、建仁寺などの住持を務めた天隠龍澤は「浦上美作守寿像贊」の中で、則宗を「浦上紀則宗」と記し



系図1 浦上氏略系図

体的に提示できるのは、則宗の登場を待たなくてはならない。しかし実際には、則宗前後の系譜ですら、浦上氏の系図は正しく記録していないのである。

ところが、水野恭一郎氏は新たに弘法寺で浦上氏系図を発見し、この問題を解決に導いている。弘法寺は現在の岡山県瀬戸内市牛窓町に所在する真言宗寺院で、中世の古文書も数多く残されている。

この浦上氏系図は、本来上から下へ親子関係などを書き継がれるところを、右から左に書き記した珍しいものである。この浦上氏系図は、他の浦上氏系図が書き漏らした人物を記載している点で信憑性が高く、極めて正確な内容であると評価されている。細かい考証は省略するが、この系図の研究成果によって判明したところを系譜関係に示すと、系図1のようになる。

政宗、宗景以降の系譜については諸説があるので、未だ確証をえない。宗隆以前にも浦上氏一族は存在するが、残念ながら系譜関係を明らかにすることは困難である。また、この系譜に登場する人物以外にも、浦上氏は史上に登場するので、必ずしも浦上一族を網羅したといえるわけではない。その点も含め、鎌倉期から室町期の浦上氏の動向は、このあとで詳しく述べることにしよう。

浦上氏と播磨国浦上荘

本書のタイトルでも「備前浦上氏」とあるように、浦上氏といえば備前国というイメージが強い。岡山県にお住まいの方は、きっとそう思われているはずであろう。逆に、兵庫県にお住まいの方にとって、浦上氏は多少なじみが薄いかもしれない。しかし、不思議なことに、備前国には浦上という地名が見当たらないのである。実のところ、浦上氏の出身地は播磨国揖西郡浦上荘なのである。最初にこの浦上荘について触れておきたい。

浦上荘は、現在のたつの市の揖保川町・御津町にわたる揖保川下流域に所在した荘園である。『和名抄』に「浦上郷」とあり、また『播磨国風土記』に「浦上里」とあり、木簡にも記されているほど古い歴史を有している。浦上荘は山陽道に面しており、河川や海上の交通にも至便な要衝地であった。鎌倉期以降は、新熊野社領・大徳寺領であったことがわかっている。史料に基づいて、もう少し浦上荘の歴史を具体的に見ることにしよう。

浦上荘が史料上に登場するのは、平安末期に至ってからである。仁安元年（一一六六）閏七月、浦上荘と隣接する下鴨社領の室三箇御厨との間で、境相論が起ったことが記録されている（『兵範記

ている。したがって、事実はどうであれ、当時は浦上氏が紀氏の流れを汲むと認識されていたことを確認できる。浦上氏が史上に登場するのは鎌倉末期から南北朝期にかけてであり、その動向が具

1、浦上氏の登場



多田源氏の祖・源満仲を祀る多田神社 兵庫県川西市

市に所在する神社である。そして、嘉暦二年（一三二七）閏九月、工藤貞祐は多田院南大門の造営に際して、応じない輩がいる場合は速やかに申告するよう、佐々布氏と浦上左衛門入道に伝えている（「多田神社文書」）。

この浦上左衛門入道は、年代的に見ても先の覚恵と同一人物とみなしてよいであろう。元徳三年（一三三一）と推定される工藤貞祐の書状にも、浦上左衛門入道が登場する（「多田神社文書」）。はたして、ここに登場する浦上左衛門入道覚恵は、のちに播磨・備前で活躍する浦上氏の「祖先」なのであるうか。もう少し別の角度からも考えることにしたい。

建武元年（一三三四）七月、後醍醐天皇は長井定頼に浦上荘（三分一、熊代村、山下部村）を与えるとの諭旨を召し返し、大徳寺に元のごとく知行するよう命じた（「大徳寺文書」）。そして、浦上荘四ヶ村の地頭職は、浦上為景に与えられたのである。浦上荘で浦上氏の名が登場するのは、この為景が初見である。

ところが、建武二年（一三三五）十二月、長井定頼は足利直義から浦上荘の安堵を受けている（「毛利家文書」）。これはこの年、足利尊氏・直義兄弟が後醍醐天皇と袂を分かつていたのが理由である。直義がこれを安堵したのは後醍醐方への対抗措置であるが、その後、長井氏が浦上荘を知行した様子

は確認できない。後述するとおり、浦上荘は浦上氏が関与するところとなる。

次に浦上氏が登場するのは、暦応二年（一三三九）を待たなくてはならない。同年、室町幕府は、広峰神社別当である広峰昌俊の所領土山荘萩原村地頭職（兵庫県加古川市）を「浦上孫三郎」が押妨している訴えを聞き、播磨国守護赤松円心に止めさせるよう命じた（「広峰文書」）。残念ながら、浦上孫三郎が先の為景と同一人物であるか判然としない。しかし、浦上氏の一族であることは確かであり、浦上荘を中心としつつ、徐々に周辺地域に勢力を広げつつあったことを認めることができる。

土山荘萩原村の問題は、観応元年（一三五〇）九月に再度あらわれることになる（「西行雑録」）。今度は、広峰神社別当である広峰長種の代官長秀が、「浦上三郎入道宗恵」が土山荘萩原村で濫妨狼藉を行っている事実を室町幕府に訴えた。訴えを受けた幕府は、播磨国守護の赤松範資に濫妨狼藉を止めさせるよう命じているのである。

ここで登場する浦上三郎入道宗恵は、先の浦上孫三郎と同一人物である可能性が高い。孫三郎が出家して、三郎入道と号したと推測される。そして、想起されるのは、先述の多田神社にあらわれた浦上孫左衛門入道覚恵との関係である。両者の血縁関係を示す根拠はないものの、法名（宗恵と覚恵の「恵」字が共通）の類似性から関係は非常に強いと考えられる。

このように、浦上氏は十四世紀初頭に史上にあらわれ、一族である宗峰妙超の縁を通じて、浦上荘支配に関わった。そして、その勢力を周辺地域に広げつつあったのである。